

アメリカ時代のLafcadio Hearnにおけるメンタルヘルス上の援助的枠組 ——彼のパーソナリティとの関連において——

(ラフカディオ・ハーン／パーソナリティ／援助枠)

遠藤 みどり*

Supporting Frameworks on Lafcadio Hearn's Mental Health in his American Days ——Related to his Personality——

(Lafcadio Hearn/personality/support)

Midori ENDO*

はじめに

Lafcadio Hearn の性格は米国では、逝去後間もない時期にすでに baffling(不可解)であるとされていた。その契機となったのは、New Orleans 時代に彼と当時の法で認められていなかった結婚をしていたアフリカ系混血女性が遺産相続に名乗りを挙げたことと、来日直前まで接触のあった Philadelphia の眼科医 Gould が、彼のアメリカでの意外な行状を暴露したことであったらしい^{2) 4)}。

Hearn のアメリカ時代はこれらに代表されるスキャンダラスな色彩に満ちているが、にも拘わらず彼がある程度の健全さを維持し得たのは、前稿¹⁾ で述べた Watkin や Bisland 以外にも、友人知己による保護的枠組が終始ある程度存在したためであろうと思われる。

CincinnatiでのHearn

Hearn は Cincinnati へ到着した当初は経済的に非常に窮乏しており、どうやら路上生活をしたことすらある模様である。

この時期に Watkin が果たした父親代理としての大きな役割に関しては前稿¹⁾ で述べた通りであるが、*Enquirer* に就職して以降は、他にも幾人かの朋友や助言者の存在が認められる^{3) 4)}。記者仲間の Johnson, Krehbiel, Tunison らとは対等な立場で切磋琢磨し、夢を語り合ったり教養を補ったりすることが出来た。Hearn は猛烈に勉強して売れっ子記者になり、新しい週刊誌を始めたりもした。*Commercial* の編集長

Henderson は、記者としては彼を酷使したが、その才能を買って好意的に見守っていた。Hearn が一人前の社会人として第一歩を踏み出し得たのは、主として彼らの協力の賜物であろう。その状況をぶちこわした原因は、彼自身が前述のように、アフリカ系との混血の気ままな女性と、周囲の反対を押し切って不法な結婚をし、のちに耐えきれずに逃げ出す羽目になったことである。

New Orleans・PhiladelphiaにおけるHearn の身辺援助者・助言者^{3) 4)}

この時期を通じて Hearn の母親代理を演じたのは、彼が毎晩夕食を摂っていた下宿屋のアイランド系主婦 Courtney 夫人であった。Hearn はこの時、大叔母の家を離れて以来おそらく初めて、落ち着ける居場所を与えられたらしい。著名人になりつつあったHearnをある程度尊敬していた彼女は、食べているところを人に見られるのを嫌う Hearn のために別室を用意して、アイランド風に修整を加えたクレオール料理を安価で振る舞い、取材のためと称する夜の探訪(売春宿や阿片窟まで含んでいたらしい)に同伴するよう甥の Denny Corcoran を用心棒につけ、Grand 島で Hearn が現地女性の虜になりかかった時には叱責を与えたりもしている。(因みに、この時 Hearn は、この女性と結婚して自分の腕一本で子沢山の大家族を養うことを夢みていたという。)

Times-Democrat の記者になってからのHearnは、編集長 Baker の夫人に好意的に遇された。彼女はHearnが、眼の障害のために、特に女性と接する時に醜貌恐怖的になっていたこと、官能性が強く、かつ、非の打ち

*心理学教室 Department of Psychology

所のない生活を送っているふりなど全然しなかったことを指摘し、「彼の性格は奇妙な矛盾を呈していました。彼は心があたたかく愛情深く、しかし同時に、非常に不信に駆られやすく、よく親友が自分を軽蔑したり傷つけたりするつもりだろうと疑いました」と伝えている。

New Orleans 時代の後半には、医学校を卒業して間もないラテン系の外科医 Matas が、文学的な教を請う手紙をきっかけに Hearn に近づいた。彼は時に、Hearn の用心棒の肥満した無学なギャング Denny に代って夜の探訪の同伴者となったり、医学的知識の相談に乗ったり眼の治療を行ったり、身体のために節制を守るように説いたりもしている。Matas はのちに、Hearn は「趣味においても気質においても病的で被害妄想的だった」が「女性のように穏やかで優しい人」で、昼夜を問わず仕事に励んでいたと回想している。ラテン系に親近感を持っていた Hearn は、Matas とは終始良好な友人関係を維持していた。しかしこの時期の終わりの、Philadelphia の WASP の眼科医 Gould との友情は、無惨な結果に終わっている。

眼科医Gouldの精神科医的役割^{2)~4)}

眼科医 Gould も、学生時代の1887年に Hearn の著作に賛辞を送ったのを契機に彼と文通を始めた。この中で Hearn は自分より2歳年長の相手に、失明した眼のことを打ち明け、自分が「常軌を逸した神経質な性格」であると述べたりしている。

彼が初めて Gould を訪れたのは1889年のことで、この時 Gould は Martinique 島から無一文で帰ったばかりの Hearn の風体の異様さに愕然としたが、半ば憐憫から自宅の一室を滞在のために無料で提供した。Gould は Hearn の眼を検査し、眼鏡をかけるよう勧めたが、Hearn は頑固に抵抗した。しかし Hearn はたちまち Gould を英雄のように崇拜し、「兄にして父にして親友」「師にして兄」などと呼んだ。

Hearn は1880年頃から、知識階級に流行していた進化論的言辞をジャーナリストに振り入れはじめ、嗅覚に異常な興味を示したり、Matas 医師に黒人の声帯の解剖学的構造の白人との差を問うなど、最新の生物学的知識に憧れた形跡が見受けられる。彼はまた「日本で医師としてならやって行けるだろう」と言ったこともあり、そうした医学への興味と自分の眼の治療への期待が、Gould 医師に対する一時的傾倒をもたらしたのであろう。しかし Gould は元々神学を修め牧師の資格も持っていた熱心なプロテスタントで、Hearn が書簡の中で無分別に吐露したキリスト教的道

徳の無視と野放図な衝動性に仰天し、以後その矯正に躍起となる。(今日のような精神科医や心理臨床家が存在するようになる前には、宗教家がそれに相当する役割を果たしていたことが多い。)

Hearn の Personality は前稿¹⁾で指摘した通り境界型人格に類するもののようで、周囲の人物に対する両価性の投影的同一視が頻繁になされ、友人知己はそれに振り回されることが多かったようである。精神医学が未発達であった当時、学問的先端とされていた感覚心理学的な反射神経症の概念とピューリタンの使命感を持ってこれに立ち向かった Gould 医師の蹉跌は、今日の医師や看護・心理・福祉畑の臨床家にとっても、身体医学的な概念や救済者の善意を精神面の問題に盲目的に適用することに対する、よき戒めとなるであろう。

進化論と反射神経症概念

Hearnが後に傾倒することになる Herbert Spencerが「心理学原理」の第1版をLondonで出版したのは1855年、Charles Darwin が進化論を体系づけたのは1859年のことである。Hearn は New Orleans で *Item* 紙の副編集長になり知識階級と接触しはじめた1870年代末頃から、この最新流行の思潮に影響されるようになったと考えられる。この時期の医学の急速な進歩に伴い、生活に多少の余裕ができた Hearn が、自分の視力の回復に望みをかけたのは当然と思える。しかし Gould 医師は、Spencer も論拠とした T.H.Huxley の神経生理学説にもとづく反射神経症概念を応用して、眼鏡による視力矯正で Hearn の性格を改善しようとしたが、強度の眼鏡の重さや持続的装着に伴う不快のため、Hearn はこれには従順でなかった。Gould は更に、倫理を説くことにより Hearn に「魂を与え」ようと試み、ある程度それに成功したと主張している。Hearn の如き Personality が、僅か数ヶ月のそのような努力によって決定的に変化するとは考えられないが、Hearn 自身も一旦はそのことを認めたといい。彼はおそらく、眼を治してほしい一心から Gould に表面的に服従し、自らにも人格変化が成就したという暗示をかけたのであろう。しかしそれは無論、最新の知識を応用しようとする熱心な駆け出しの心理治療者との種の性格の患者との間に今日でもしばしば見られる現象と同じく、永続きはしなかった。

Hearn と Gouldとの交友は、Gould が Hearnの原稿を講演に利用したりして破綻を来たし、Hearn が Harper 社の特派員として日本へ渡航することになって終わりを告げる。無一文であった Hearn はこの間

の借金や謝礼を、以前 Harper 社の編集長 Henry Alden に(借金のかたとして?)遺贈する旨の自筆遺書を添えて預けてあった自分の蔵書を Gould の元へ送ることで支払うべく一方的に決め、日本到着後 Alden に手紙でその依頼をしたが、これは Gould らの WASP 的道德からすれば、Alden に対してもこの上ない非礼であった。Hearn 自身も書簡の中で「北部人」Gould への反発を表明している。

ここに見られるのは、弁護しようのない Hearn の非常識と自己中心性である。また前述の Gould 宛書簡の中で彼は、自分の性的放縦さと衝動に対する制御のなさや無神論をあけすけに吐露しており、かつ、それに対する反省や羞恥の言はあまり見当たらないようである。これらの事実が Gould を呆れさせ、Hearn の死後、彼の管財人 McDonald が上述の蔵書を未亡人の手に取り戻そうとし、かつ貸与した資料の一部を Bisland が Hearn の伝記・書簡集から削除したことと相まって、Gould の怒りを爆発させ、非難に満ちた 2 冊の著作を公にさせるに至った。その中で Gould は Hearn を「カメレオンのような人物」とであると断じている。これらの著作は Gould 独自の「眼鏡哲学」にもとづいて、Hearn の性格の原因は強度の近視であると述べているので、今日では「奇書」扱いされているが、そのことはむしろ、Victoria 朝紳士として Hearn に対する憤懣を、当時の最新の科学的知識を応用して知性化しようとした、Gould の心的防衛のあらわれと見なすべきであろう。(付録参照)

Hearn の Personality

アメリカ時代の Hearn には上述のような不道德と見られる行動があった反面、特に New Orleans 時代以降、虐げられた人々や欧米人以外の種族に属する人々や動物に対しては非常にやさしい態度を示したこともよく知られており、日本での自らの家族とその縁者や学生たちにとっても、情味溢れるよき家長・教師であったことは事実である。

こうした Hearn の Personality の二面性は、彼の置かれた境遇によるところが大きいと見られるが、上に述べた様々な行動や周囲の反応からしても、前稿¹⁾でも指摘した境界型パーソナリティー構造に由来するものと見ざるを得ない。

Hearn は 2 歳で生地ギリシャからアイルランドへ根こぎされ、その後イギリスやフランスで教育され、宗教的にも幼時からギリシャ正教・英国国教・カソリックと盪回りにされたため、文化的アイデンティティーを確立することが困難であった。その上、幼時に父母

と別離した彼は、両親を憎い父と恋しい母という一面でしか眺められず、他の側面を統合した両親の全体像を把握することが出来ずに育った。一度だけ出会ったアイルランド人の継母も、美しい人として記憶していたが、大叔母に注ぎ込まれた「実母を奪った憎むべき女」という説明以外の側面を見ることができず、養育者となった大叔母の厳格なカソリック信仰への反感は、彼の中にアングロサクソンの正統的道德や美しい女性に対する両価感情と、罪悪感を伴う異教への憧れを育てた。しかも彼はそれを十分に処理することができないうちに、眼の障害と貧困というハンディキャップを負ってしまった。女性への劣等感はその感受性を歪め、両価感情は自らのうちに抱え込まれたままとなった。このことは彼がアメリカに渡ってから、善と悪との鮮明な二分法でしか対象を認知できず、自己に善を施すと思われ愛着した相手の中に批判的な側面を認めるや否や、相手の全体を悪として認知し攻撃の対象と見なしてしまうという結果を生んだ。その置かれた厳しい社会的境遇から、彼はこの部分的対象認知を修正することが出来ないままに 20 歳代を終えたと見られる。生活に余裕の出来た 30 歳代の彼はすでにそのことを自ら薄々感知していたようであり、Gould への一時の傾倒と赤裸々な告白は、おそらく何者かに帰依することにより自らの性根を入れ替えたいという欲求から発したものであろう。この過程は、部分対象の投影的同一視に基づく自らの対象関係の在り様と、それが自分の対人関係を歪めている事実を彼が実際に把握するために必須であったと考えられる。

このような Personality を有する人物の治療には、著しい逸脱を防ぐ可塑的な枠組と、あたたかな holding が必要で、その際、治療者側の逆転移に十分注意する必要があることは、今日では常識である。残念なことに当時はまだ、Freud すら Charcot のもとを離れたばかりという精神分析発生以前の時期であり、Gould の「初心者の万能感」を戒め逆転移に警告する人もなかったため、双方が傷つく結果になったわけである。

しかし Hearn が来日後、人格統合をなしとげて一生を終えることが出来た背景には、明治政府による道德の枠組がその頃にはほぼ確立されていた上、それ以前のアメリカ時代に既に、逸脱を防ぐゆるやかな枠組がいつも周囲に存在していたことが大きく与っていると考えられ、Gould を相手になされた自己解剖と洞察がなければ、日本での治癒的要因が Hearn に対して十分な機能を果たし得たかどうかとも疑わしく思われる。もしも Gould が今日の精神療法家の心得の基本を弁えた治療者として行動することが出来ていたとしたら、

また、もしも晩年の Hearn がアメリカに戻って、損なわれた関係の修復と適切な事後処理を行っていたとしたら、没後の評価逆転による遺族の心痛もかなり避けられたのであろうが。

結 語

Lafcadio Hearn がアメリカ時代に接触した周囲の人物のうち、彼の人格の統合に寄与したと思われる人々の役割を検討した。ある者は保護し、ある者は能力を認め、ある者は文学面で彼の教えを受けると共に友人として交わり、ある者は Victoria 朝道徳と進化論の影響下で、知識を供与し身体的な Care を与え、ある者は敢えて彼の世紀末の不道徳を批判し、しかし総体としては、可塑的な援助の枠組を提供した。日本における Hearn の晩年の人格統合の成功の背後には、こうした準備段階の存在が大きく寄与していると考えられる。

文 献

- 1) 遠藤みどり (1997): Lafcadio Hearnの病蹟. 島根医科大学紀要20:17-21
- 2) Gould GM(1908): *Concerning Lafcadio Hearn*. T. Fisher Unwin, London
- 3) Stevenson E(1961): *Lafcadio Hearn: A Biography*. Macmillan, New York
- 4) Tinker EL(1925): *Lafcadio Hearn's American Days*. John Lane The Bodley Head, London

付録1

Lafcadio Hearnについて²⁾ (抜粋訳) Concerning Lafcadio Hearn by George M. Gould, M.D. (1908)

一人の人間の伝記は伝記作者の数だけ存在しうる——が、もう一つ！ Lafcadio Hearn に関しては今まで、如何なる伝記にも言い訳は要らなかったし、今後もそうであろう。適切に編纂された彼の書簡集、そしておそらく、彼の想像力と文学的特徴の方法論やその発展の批評的な概観は、現在最も望まれているものであり、そのようにあり続けるだろう。この仕事の有能な引き受け手が見つかることは、ある人物の最上の作品の価値を認める人々によって未だに望まれている。私が以下の頁を編む目的は、この目標に向かって資料を提供し助力を与えることである。文学的人物の人生は、彼が創造した文学故に、世界にとって興味深くまた価値あるものである。文献解題を欠いては、彼の書いた作品への言及すらなければ、彼の伝記は無用であろう。彼と彼の人生に関してこれまで公表されて来た、多数の重大な性質の、誤解に導き事実と反する叙述や推論を訂正することは、非常に困難で報いのない労働と判明するだろうから、それを正しく行う人間がそこに足を踏み入れることはあまりないであろう。それが敢えてなされぬだろうということは、それが必要とされていない、何故なら、私がすでに述べたように、Hearn自身も、彼の友人たちも、また更に、目の高い文学的感覚の持ち主も、彼の「偉大さ」に関し如何なる思い違いもして来なかったし、する可能性もないから、という事実から来るのである。彼は「偉人」と言われて来たが、無論のこと、彼はそうでなかった。彼は二つの才能を持っていたが、これらは人格的偉大さを構成するには程遠かった。素質や彼の生活上の必要や意識的な意図のために、宗教も道徳も学識も寛大さも忠実さも性格も博愛も、それ以外の人格的偉大さの構成要素も欠いているのに、彼をそんな誤った形で世界に呈示しようと努めることは、愚かと言うに余りある。

この状況の皮肉さは、彼が非常に偉大であるとする、彼が口にすべきでないと言っていた「非常に偉大な人々の弱点」が、書簡の中に目ざましく陳列されているという事実によって、感傷的なまでに宥められる。自分の手紙が公表されるであろうことを夢にでも知っていたなら、彼は自分自身とその欠点をそれ程まで恥知らずに衆目に曝さなかったであろうし、また出来もしなかったであろう。事実は今や極度に多量書いてあり、まさか訂正や否定はされないだろう。無論なされ

るべきでもない。賢者には一言で十分なのである。

(中略)

性格は環境に対するパーソナリティーの反応であり、環境の下位にあってそれに凌駕されるのではない。性格を持つことは環境を調整することである。しかし Hearn は常に環境の奴隷であった。文学的な優秀さの追求という点以外、Hearn は如何なる性格も持っていなかった。彼の心は、私が今まで知っている中で最も無抵抗な、最も模倣的なものであった。彼は完全なカメレオンであった。彼はその時々自分の周囲の色を身にまとった。彼は常に、その瞬間の友人の、或いは友人がいなければその瞬間の夢の鏡であった。次の一瞬には彼は別の人間になり、新たな環境の働きかけを受け、新たな友人を反映し、あるいは、古い夢や新たに見出した夢をまた夢見ていた。古くからの友人への彼の不誠実や忘恩を過度に咎める人たちは、彼を心理学的に理解していることにはならない。身体的・神経学的な機械の背後には、誠実であったり不誠実であったりするようなものは存在しなかったのである。彼は誠実や不誠実を持つべき心とか性格とかいったものは所有していなかった。大体において彼は、単に友好を絶ち、友人や敵の悪口を言うことは稀であった。彼の中には、おそらく友人が自分に魂を与えてくれたと彼が言った短い時間を除いては、誠実や不誠実、感謝や忘恩の型と機能を取得すべき何ものも、存在しなかったのである。こだまは、独自性、あるいは大きな恒常性すら、問われないものである。そして Hearn は、これまで生きていたあらゆる人間の中で最も完全に、こだまであった。その事実、つまりこだまに、彼がもたらした唯一の美点、唯一独自のものは、色彩——不具となった感覚の独特の派生物であった。彼は何一つ創造も案出もしなかった。彼の物語は常に他の人が彼に語ったものであった。最初それらは恐怖と吐き気すら催させる気味の悪い話であった。彼は熟練によって、より愛すべき物語、それも常に遠い、時には無限に遠い所の話を選び、より芸術的な技能と、並ぶもののない優雅さをもってすら、それらを再話することを学んだ。彼の長所、ほとんど唯一の彼の長所、そして彼独特の技は、そのこだまを、海や浜に未だかつて射したことのない霊的な光ですべてが輝く、天空の虹やこの世のものならぬ日没の色調で彩る不可思議な才にあった。そのため彼は自らの作品と融合し、彼自身が、かの在るべからざるもの、彩られた声、多彩なこだまとなったのである。

したがって我々は、無教育で友もなく、完成した性格もなく、野蛮で際限のない旺盛な食欲を持ち、感覚

の中で最も重要なものは損なわれており、貧困に打ちめされ、先のことを考えず、奇妙で感じのよくない姿や振舞いをし、多くの点で自分自身よりもっと病的な異界に飛び込んだ、我々が見た通りのこの青年、我々が見たままの事実を、受け入れるしかない。そもそも彼が生きていたことがほとんど驚異的なものであり、そして、彼が悶えながらも切り抜けたこと、彼がどうやってそうしたかということ、また彼が遂に芸術と文学の世界最上の識者たちに大切な価値と悦びを贈った方法などは、実際或る種の注意と研究に値する。(後略)

付録 2

Lafcadio Hearnのアメリカ時代⁴⁾ (抜粋訳)

Lafcadio Hearn's American Days
by Edward Laroque Tinker (1925)

Gould 博士と Hearn 氏

道徳的汚点の問題をすべて除外し単に相違点だけを述べても、Gould 博士と Hearn 氏の間には「ジキル博士とハイド氏」の間にあったのと同じほどの違いがあり、しかも彼らは一時親友だったのである。

最初の一步を踏み出したのはフィラデルフィアの眼科医であった。彼は1887年4月に、Hearn がまだニューオーリーズにいた時、彼の或る翻訳への非常な賞賛を表明する手紙を Hearn に出した。内気さと自分が身体的に人に嫌悪を催させるという固定観念から、Hearn は常に知的交友を専ら手紙を書くことに限っており、それは彼にとって個人的な交際のやりとりよりもずっと容易であったので、教養と文学への関心を示している手紙の人物からの賞め言葉に心暖められた Hearn は、たちまち嵩のある長い書簡のやりとりを始め、それはやがて極めて親密なものになった。白紙の便箋は常に彼からごく内密な考えを引き出す効果を持っていたようで、彼の場合、見知らぬ人が居合わせると常に逆のことが起こり、そうした考えは表現されなくなるのであった。それらの手紙は文学、なかんづく Gautier や、色彩感覚などを扱い、最後には Hearn の視覚の欠陥にまで進んで行った。—— Gould 医師は、自分が反射神経症などの専門的・科学的な主題について書いた様々な記事やパンフレットの別冊を彼に送った。こうしたものは Hearn に非常な印象を与え、彼は Gould に「あなたは極めて非凡な心をお持ちに違いありません。……実際、自分の空想の作品をあなたの御著のような知識の所産と比べると、私は全くちっぽけに感じます」と書いた。

(中略)

Gould 医師は Hearn の仕事に非常に同情的な興味を抱き、彼の健康と視力に関し、あまたの有益な助言を与えた。彼は多くの努力の後に、Hearn に熱帯の衣服を更めさせ、街路を歩いて群衆の注意を引くのを避けるに十分なほどにフィラデルフィアの人らしく装わせることが出来た。Hearn はこうした親切すべてに感謝し、この医師への強い愛着と信頼の念を顕わにした。彼の心の中で豊かに枝葉を伸ばしたこうした感情は、彼がこの医師を崇拜し、彼の足下に讃仰の香を燻じ、彼に自らの最も内奥の心の秘密を告白するまでに至らしめた。それから、非常に奇妙なキャンペーン——品位ある知的なやり方の伝道集会のような性質のものが始まった。Gould 医師は押しつけがましく、そして実利主義的で科学的な性向の持ち主で、彼の堅固で曲がることのない道徳観念は、清教徒である先祖から受け継がれたものようであった。こうした生活の質や理論は Hearn にとって、ちょうど殺菌剤が黴菌に対するように正反対のものであった。そしてこの善良な医

師が彼の友人のために演じる決心をしたのは、まさに殺菌剤、一種の防腐剤の役割である。

その時までの生活が二つの耽溺的な情熱——その一つは文体の完全な美に到達しようという強迫観念、今一つは、宥め難い情欲の充足——に占められていた四十男を改心させ、貞潔さへ転じさせようと試みるものが徒労であるのは、他の誰しもが知っていることであろう。そのような変化を達成できるのは、年齢、病気、あるいは幸福な結婚だけであつたらう。それはまるで、兎が激しい欲望の罪に関する講義を聴いたあとで聖アントニウスの苦行を真似るのを期待するようなものであつた。しかし Gould 医師の心の中の、おそらく清教徒の先祖から受け継いだものの一つである或る奇妙なコンプレックスは、Hearn を改宗させようという自分の企てを、望みのない計画と見なすことを許さなかつたのである。そして更に奇妙なことに、Hearn 自身も同程度にそのことに鈍感であつた。

(後略)

(受付 1998年10月2日)